

---

# さゆと千里

雄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

さゆと千里

### 【Nコード】

N7186C

### 【作者名】

雄

### 【あらすじ】

舞台は京都島原。幼いときから島原遊郭ではたらくさゆは、たくさんのお金を学んでいた。女は男をたてて生きていく。遊郭の掟に逆らった者は命がない。そこで出会ったひとりの客。その客がさゆのすべてを変えてゆく。

## 麗しい泡沫

独特のにおいがする和室に、うちはおった。

鏡に映るうちは、厚い化粧で仮面をして、黒目は曇っていた。

隣の女は化粧をしながら、小さな声でこう言った。

「逸枝ねえさん、足抜け失敗したんと」

どきりと心臓が動いたが、女の顔を見ずに化粧を続けた。

周りの女たちはできるだけ声を小さくしてざわめいた。

開店前の客や、遣り手、親父はなんか聞かれたりなんかしたら・・・

そんなこと考えるだけでもおぞましい。背筋が凍った。

そしてひとりの女が、興味有り気に問うた。（要らんことせんでもよろしいのに）

「男に騙されたんやと」

「まあまあ、お気の毒に・・・」

「こったいはんがひとりお寺に入ったんやもの。ええ機会やわ」

逸枝ねえさんは、こったい、いわゆる太夫で、

ここの看板娘とゆうても過言ではないくらいお美しい方やった。

風の噂で、逸枝ねえさんに間夫まごがおられたと耳に入ったことがある。その間夫は、逸枝ねえさんを裏切ったということ。それだけはうちの頭に強く残った。ほんまに、目がくらみそうなほどに強く。

化粧道具を片して、うちはいろんなにおいが充満する部屋から出た。

「さゆ」

さゆ、とはうちの源氏名。

うちの名を呼ぶ声はいやらしく、遠くから呼ばれているのに耳付近で呼ばれたように感じた。

恐る恐る振りかえると、うちの最も苦手とする視線がうちを見つめていた。

「はい、どないしましたか、番頭はん」

「朔夜さくやがおまえを呼んどった」

朔夜ねえさんは、うちが禿かむいのときから世話になったお方。

当時うちは朔夜ねえさんの禿をつとめており、最近禿を脱したうちを心から喜んでくれとった。(そういえばお酒がどうだとかゆつてはったわ)

「すぐ参ります。おおきに」

「ああ。それはそうと」

「はい？」

「逸枝の話はほどほどにするんやで」

「・・・え？」

「行き」

にやりと口角を上げ、うちの左肩に大きな手を乗つけたあと、静々と去っていった。

まずい、聞かれてもうた。しかも番頭に。

折檻にあう遊女のことを口に出すのはご法度である。

もしも親父はんに聞かれてたりなんかしたら、うちの命はないかもしれない。

そんな気持ちを尻目に、うちは朔夜ねえさんの部屋に足を運んだ。

「よう来たね。あがり」

「失礼します」

「禿卒業つちゆうことやし、今日はお酒でもお飲み」

「よろしいんですか？」

「番頭や遣り手には内緒やで」

「はい、いただきます」

朔夜ねえさんが注いでくれた日本酒をのどの奥に流し込む。

じわじわと、のどの先端から熱くなるのを感じ、それからからだ全体に熱が帯びた。

そして先ほどあった出来事を朔夜ねえさんに話した。

朔夜ねえさんは持っていたお猪口を置いて、大きな目でうちを見た。

「逸枝ねえさんが折檻なつたゆうのは知つとつたけど、やっぱ寺行きやつたんね」

「ええ。あんな身分のお高い方でも寺行きなんて、信じられまへんわ・・・」

「それで、あんたらがその噂してんの、番頭知ってはつたんやろ？」  
「多分、ふすまから声が漏れてたんやと思います。面倒なことになりましたわ」

「そう。あの番頭は曲者やからね、あんたも気いつけえや」  
「はい」

短い極楽のときは過ぎ、これからひるみせ昼見世がはじまる。

自分のお高い方は忙しいが、うちのようなふりそでしんぞう振袖新造は暇を持て余す時間だ。

お酒のおいを放たないように、いつもより香水を多くふりかけた。客は来ずとも、気を抜いてはいけない。そんな世界でうちは生きている。

そう、男の天国は女の地獄。逸枝ねえさんの間夫も、今はどこかでこのうと暮らしているんやわ。

だって、最後に痛い目見るのは、ぜんぶ女やもの。

（もう逸枝ねえさんに会えないと思うと、今さらながら寂しくなっ  
た）

## 麗しい泡沫（後書き）

初連載です。

難しい言葉が出てきたりするので、

<http://hagakurecafe.gozaru.jp>

[/yosiwaratop.html](http://yosiwaratop.html)

など参考に見て頂いたら、

より楽しめると思います。

感想、批評など頂けたら幸いです。

## 初会相手

夜はあっけなく来るもので、気付けば太陽は沈んでいた。

番頭が花魁おいらんはんたちと楽しげに喋っているのを見て、吐き気がした。確かに、番頭は顔が良い。端正な顔立ちをしており、素敵な男性やと思う。

それはすべて外見だけで、中身なんて見れたもんじゃない。(うちのような遊女がゆうことやないのは知っとるけど)

不意に目が合い、うちはすぐに目を逸らした。笑い声が聞こえる。

「さゆも来いや」

「いえ、うちは結構どす」

こんな身分の低い女をからかうなんて、根性腐ってるわ。

ここで怒鳴ってやりたいものだが、そんなことしら言つまでもなく寺行き。

下を向いて時が過ぎるのを待った。すると、若い衆の声が聞こえた。

「さゆねえさん、お客さん来てますよ」

「え？」

「初会やゆつてました。なんや有名なべべ着てはったから、ぼんぼんや思いますけど」

「そう・・・部屋はどこに通してはるの？」

「惣離そうりまがわです」

「まあ、あかんわ。初会やる？」

「そう言われましても、こんなにもろたら断りきれまへんわ」

惣離がある部屋は、太夫はんや花魁はんが使う高級な和室。

初会のくせに、と心の中でつぶやいたが、若い衆が持っている銭を見ると、相当な額みよつだいだった。

名代みやうだいもろくにしたことのないうちが、何故このようなお方と？

一応引つ込み禿かぶやったゆうても、接客なんて聞いた話でしかない。ああ、どうしよう、不服にも怖いなんて思ってしまった。

「親父はんは、このこと知ってはるの？」

「ええ、承諾済みです」

「・・・そう、ほな行ってくるわ」

「行ってらっしゃいませ」

若い衆はひどく浮かっていた。

そりゃあそうやろう。あんな大金、うちも初めて目にした。

惣離がずらりと並ぶ廊下を歩くと、うちの名前が書かれてあった部屋の前があつた。  
薄暗い部屋に入り、深々とお辞儀をする。相手の顔は、もちろん見えない。

「さゆと申します。よろしゅう」

やっと顔を上げ、前を見ると、若い男の背姿が見えた。

武士のような威厳は持つておらず、どんな罪でも許してくれそうな秀囲気と物腰が噴出していた。

ただ、うちの自己紹介は独り言のようになってしまい、お武家様はなにひとつ言葉を発しない。

「お武家様？」

「・・・ああ、すまん。ここから見える景色がきれいでな、見惚れてしまうてん」

この人の声は、どんなものでも震えさせるような切ない音をしてい

た。  
もちろん、うちの心臓は小刻みに震え、涙腺が壊れそうだった。こちらを振り返り、やっと顔をあわせた。切れ長の目をしており、つきのひかりが照らす肌は白く、若いのに凜としていて、まるで物語の主人公のようだった。

「名は？」

「・・・あ、さゆと申します」

「そうか、・・・さゆ、か」

「お武家様、失礼ですがお名前なんぞ教えて戴けますやるか？」

「ああ、虎鉄竜貴こてつたつぎゆうねん」

苗字持ちさんや、と頭の隅で書きなぐって、そしてすぐに消した。見るたびに、きれいな人やと感じる。一目で人の心を鷲づかみにする、素敵なお人。  
夜風で艶やかな黒髪が揺れると、かいだことのない優しい香りが鼻についた。

すると、竜貴はんは静かに笑って、目線を逸らしながらこう言った。

「実はな、こうゆう店来んの初めてなんや」

「そうやったんどすか、」

「卑猥な店かと思うとったが、さゆを見て見る目が変わった」  
「嬉しゅうございます」

「・・・それはそうと、酒は飲めるか？」

「ええ」

うちは、日付が変わる手前まで竜貴はんと酒をたしなんだ。

竜貴はんはお酒に強く、うちの話始終やわらかい表情で聞いてくれた。

ほんまは竜貴はんの話のうちが聞くのが遊郭での常識なのだけど、構わんと首を横に振り、うちのお猪口に酒を注いでくれた。

そして、なにもせず帰っていったのだ。

「さゆ、初会のお方どやったん？」

「・・・とても、善いお方でした」

「まあ、こんなにもろたん？」

「断つたんですが、引かんくて、」

「はあ・・・引つ込み禿出身はちやうなあ」

「いえ、そんな・・・」

「貸し。伽耶かやねえさんに渡しといたるから」

「ええ、おおきに」

「もう寝え。明日も早いさかい」

「はい、おやすみなさいませ」

遣り手と鉢合わせるなんて、ついてない。

でも、遣り手と別れたあとでも続くこの心臓の叫びはなんなんやろう。遣り手と会ったからやない。遣り手に金をぶん取られたからやない。たぶん原因は、竜貴はん。

だって、“虎鉄竜貴”という名前を思い浮かべただけで、こんなにどきどきしてんねんもん。

ふと思い出した。

今朝の会話、そう、逸枝ねえさんの話を。

逸枝ねえさんは、男に騙されて命と落とした。

もし竜貴はんのこと本気になってしまったら、逸枝ねえさんの二の舞や。

そうしたらうちも寺行き。そんなのは絶対に嫌や。

蠟燭の火を消したついでに、竜貴はんのお顔も忘れればええのに。  
(それでもどこかで、明日も来てくれへんやろか、なんて思ってた  
りするの)

## 初会相手（後書き）

これからどーなるか、雄にも分かりません笑  
感想、批評など頂けたら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7186c/>

---

さゆと千里

2010年10月11日21時03分発行